

飛び出せ 学校

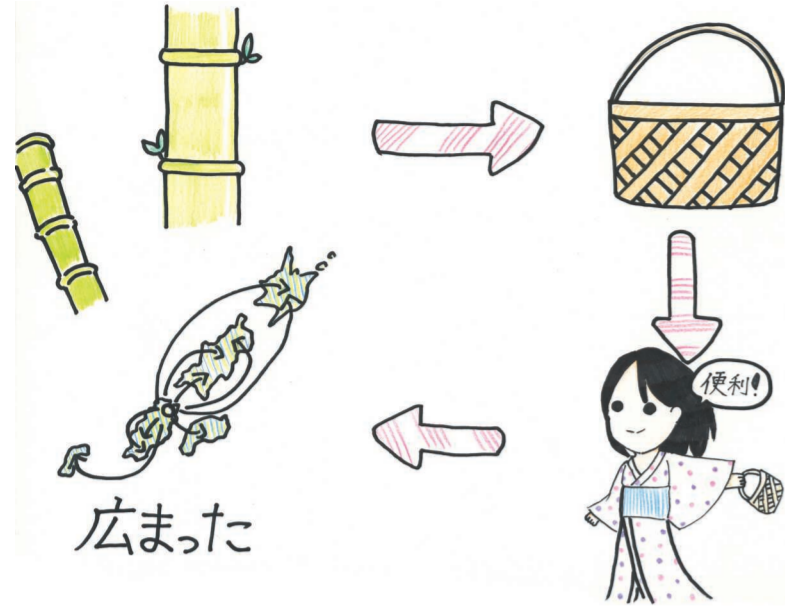
この新聞は、明星小学校の6年生(古椎賢一教諭、佐藤与幸人教諭、野中洋克教諭=5年時の担任=44人)が、大分合同新聞の記者と一緒に作りました。(肩書は制作当時)

大分合同小学生新聞

発行者
別府市
明星小学校
6年生



私たち明星小学校の6年生は、別府市の伝統工芸「竹細工」をテーマに取材しました。4年生の時に社会科の郷土学習で学びましたが、ラグビーワールドカップの時に竹で大きなラグビーボールを作ったりしているのを見て、あらためて興味を持つようになりました。別府市竹細工伝統産業会館や竹製品を卸売りしている企業を訪れ、竹細工の魅力、歴史、伝統工芸士の方の技、竹細工に関わる人々の思いを紙面にまとめました。



なぜ、別府で竹細工が作られるようになったのでしょうか。私たちが予想した答えは、「別府市は全国的に有名な温泉地なので、お客さんが着替えやタオルなどを持ち運ぶ時に竹かごが必要だったから」です。この予想は、半分当たっていました。竹かごに入れていたのは衣類ではなく、温泉の蒸気で蒸した野菜などの食べ物だったとご存知ですか。竹かごは熱に強く、温気を逃がすので、野菜を蒸して持ち帰るのに使われていました。湯治に来たお客さんが「これは便利」と、竹かごを他の地域に持ち



私たちは、竹細工はほとんど竹が使われ、どのように作られているのかが知りたくなり、別府市竹細工伝統産業会館を訪れました。館内に入ると、竹細工の大作「雲龍」に圧倒されました。この作品は27年前に作られました。学芸員さんに



「束ね編み」と、その龍を囲む雲をイメージした「輪弧編み」が用いられているそうです。竹細工は、複数の編み方を組み合わせて作られることが多くあるということです。竹は世界で約200種類、日本だけでも約600種類あるそうです。竹細工に使われる竹は「マダケ」「モウソウチク」「クロチク」などで、作る物によって種類を変えます。特に加工しやすい竹は「マダケ」だそうです。竹細工は、竹を薄く切って「ひご」を作り、そのひごを編み込んで作ります。最初は白っぽい色ですが、3カ月ほどたつと酸化して茶色くなるそうです。竹は硬くて強い素材ですが、ひごにすれば自由自在に加工することが出来ます。



向功彦さん

私たちが、竹細工の現状を調べようと、竹製品の卸売りをしている市内石垣東の「竹苑」を訪ね、社長の向功彦さん(68)にお話を伺いました。売れ筋は、竹とんぼや風車、水鉄砲など竹のおもちゃやだそう。このほかにも竹箆や踏み竹などたくさん竹製品を扱っています。向さんは「安心して良い品物を」というお客さんの要望に応えながら、別府の竹製品を全国に出荷しています」と話していました。海外にもPRしている



私たちは、竹細工の現状を調べようと、竹製品の卸売りをしている市内石垣東の「竹苑」を訪ね、社長の向功彦さん(68)にお話を伺いました。売れ筋は、竹とんぼや風車、水鉄砲など竹のおもちゃやだそう。このほかにも竹箆や踏み竹などたくさん竹製品を扱っています。向さんは「安心して良い品物を」というお客さんの要望に応えながら、別府の竹製品を全国に出荷しています」と話していました。海外にもPRしている



油布昌伯さん 大谷健一さん



竹細工職人になろうと思った理由は、「ものづくりは楽しいから」。1日8時間は、作業場に散らかっている、いい仕事はできません。竹細工職人になろうと思った理由は、「ものづくりは楽しいから」。1日8時間は、作業場に散らかっている、いい仕事はできません。竹細工職人になろうと思った理由は、「ものづくりは楽しいから」。1日8時間は、作業場に散らかっている、いい仕事はできません。

「伝統産業会館の2階では週に1回、竹工芸教室が開かれます。私たちが取材に訪れた時、20人くらいの生徒さんが真剣な表情で竹を編んでいました。作業が一生懸命な頃、私達は生徒さんを指導している「竹工芸の名人」にインタビューすることが出来ました。伝統工芸士の大谷健一さん(55)です。大谷さんが心掛けていたのは、使う人の身になって作品を作ること。整理整頓も大切だと話していました。作業場が散らかっている、いい仕事はできません。竹細工職人になろうと思った理由は、「ものづくりは楽しいから」。1日8時間は、作業場に散らかっている、いい仕事はできません。

新聞ができるまで

別府市の伝統工芸「竹細工」への理解をより深め、温泉以外にもある別府の魅力を知ってもらいたい。別府市明星小の新聞づくりは児童の疑問と好奇心からスタートした。きっかけは昨年のラグビーW杯。児童たちもよく利用するJR別府駅前に、竹ひごで編まれた巨大なラグビーボールが出現した。「4年生のときに郷土学習はしたけど詳しいことをもっと知りたい。より深く学ぶため市内の竹細工職人らを訪ねた。初めに、児童は市竹細工伝統産業会館で「竹工芸の名人」に話を聞いた。「どうして竹細工職人になろうと思ったのですか」「かごが編めるようになるまでどのくらい時間が必要ですか。自分たちの興味・関心をふくらませ、さまざまな質問を投げ掛けた。同市の卸売業者「竹苑」では、海外でも流通している別府の竹製品の魅力を取材。世界に広がっ

別府市明星小



左:大津記者から取材の仕方や紙面の作り方を学ぶ明星小学校の児童(2019年7月12日) 中:作り手の思いを聞こうと「竹工芸の名人」にインタビュー(19年12月18日) 右:「分かりやすい見出しを付けよう」みんなで案を出し合った(20年7月29日)

温泉以外の魅力知って



新聞づくりの様子をご覧ください

ている地元産品の素晴らしさをあらためて確認した。記事を書き始めると、多くの人に読んでもらう文章を書くことの難しさを実感。「一語一句間違いないように」と慎重に校閲を重ね、納得いくまで記事を書き直した。担任の古椎教諭は「児童たちは文章の読み方などを意識するようになった」と感じしていた。

取材の仕方は大津麻菜記者(25)=大分合同新聞社別府支社=が説明。見やすいレイアウトや見出しのつくりは伊東勇一記者(37)=同ニュース編集部=がアドバイスした。

この企画は小学生(主に5、6年生)が、地域の魅力や課題を取材し、新聞にまとめる作業を通して古里を見詰め直すことを目的としています。問い合わせは大分合同新聞社地域連携室「飛び出せ学校」係へ。☎097-538-9729、Eメールnie@oita.press.co.jp